

まえがき

はい、皆様こんにちは。あるいは、おはようございます。またあるいは、こんばんは。最近、自分が何者なのか、よく分からなくなってきた方のフジカワさんこと、エロゲーのシナリオ屋・不二川巴人ふじかわともひとです。

このたびは、私の二冊目の詩集となる、『行き先のない道標』にご興味をお示し頂き、誠にありがとうございます。前作に当たる『砦の前で』が、過去に書きためた、比較的古い作品ばかりだったのですが……今回は、全部新たに書き下ろしました！ きっかけは、二〇一四年十一月に東京で開かれる『文学フリマ』に、久しぶりに出ようと思ひまして。今までに出した Kindle 版同人誌のサンプルを、オフセット本にして無料配布しよう……という計画なんです。

んで、既存作ばかりではなく、なんか新刊を作りたいなあ……と思った時に、「そうだ、『今』の詩を書こう！」と決めたわけです。最初は、「また五十編書いてやんよ！」と鼻息も荒かったのですが……だんだん疲れてきまして(笑)。ブログの読者さんや、周囲の友人たちに聞いてみたんです。「頒価が百円の詩集なら、何編入ってれば満足しますか？」って。そしたら、「十編〜十五編」という回答が得られました。じゃあ、もうちよつと頑張つて、二十編書いてみよう……と決めて、執筆を始めたわけです。

まあ、例によって、拙い作品群ではありません。ただ、以前のようにな、あからさまに病んではいません(笑)。能書きはさておき、とりあえずはまあ、ご覧下さいませ。

それでは、はじまり、はじまり……。

『宿痾しゆくあのようなもの』

僕には なにもない
仕事も 最近はしていない
暇だけ たくさんある

僕はまた すぐくずぼらです
ひねもす のたりのたりしています
それでも ものを書き続けます
シナリオ とか
創作小説 とか
こういう 詩とか
書かずに いられないのです

不安とか 恐怖とか 空虚とか 後悔とか
なんでも 文字にするのです

それは 強迫観念 にも似ています
もしも 手を止め 木偶になれば
その時 『僕』は『僕』で『なくなる』のです

少し前 とある占いを 見ました
頭から 信じる愚は 犯しません
伝道師 だそうです 僕は
こんな 取るに足りない 文章で
人々を 『導ける』なんて おこがましい でしょう

そもそも この詩は 僕自身のために あります
面倒臭い そしてまた 御しがたい
どろどろ ぐちゃぐちゃ とした 表現衝動
それらを ただ単に ちよつとばかりの韻で
書くだけ それだけです

けれども 僕からそれを 奪ったら
文字通り 僕はただの 肉でできたずだ袋に なりはてます
才能とか 関係はないのです
正確には 詩の体裁を 成していなくても
そもそも 詩ですら なくとも
なんでも ひたすら 書くことが

僕として 唯一の救い なのです
もうはや 病気だと 思います
因果とか 飛び越して
宿痾だと 思います

それでも 気持ちと同じく する人が
これらを 読むことで 少しでも
心の中の 細かな細かな細かなヒダが
ざわざわ いえ そよそよとでも
そよいで くれれば それでいいと 思います

——僕は今でも 砦の前で 戦っています

『ぼんぼん』

僕は今 腹が減っている
それは 食べ物を詰め込む胃ではなくて
きつと 見えない もう一つの胃袋
たぶん 美味しいものでも 膨れない
まして 痛いそれでも 膨れない
すごく 欲張りな
まるで 牛のような
空疎な 空疎な 空疎な 空疎な
言葉に できない
胃袋が 悲鳴を上げている
欲しい 何が？
感情が 欲しい
正しい 感情が
例えば 笑いが
笑いが 欲しい
笑顔に なりたい
誰かを 笑わせたい
自分も 笑いたい
それが きつと
僕が今 望むこと

『遠いあなたへ』

あなたは今 どこにいるのでしよう
連絡が切れ もうずいぶんになります
あなたとは 季節を三回 共にしました
なつかしい あなたとの 魂の会話
あなたには わたしが 何だったのか 知りません
わたしには あれは 紛れもなく 恋でした
ただしかし あまりに わたしが
今にすれば あまりに 鈍感だったのでしよう
繰り返して あれは 恋でした
ほんの少し わたしに 勇気があったなら
もしかして あなたは今でも 側にいてくれたのかも
今でもなお 私の連絡帳には あなたの
電話番号が 入っています
ほんとうに 申し訳ない事をしました
あのときに あなたが自分の素性を 教えてくれた
その意味を わたしがきちんと汲んでいければ
悔やめども 時は戻りません 分かっています
わたしの中 あなたは もういない
あなたの中 わたしは もういない
全てがもう 後の祭りなのです
それでも今 わたしは言います

「わたしは あなたのことが 好きでした」

照れ臭い言葉 ですが
失って分かる 陳腐さですが
せめて今後は あなたとの想い出を
こころの奥の 宝石箱へ
大事に大事に しまっておいて

明日からを 注意深く
これからを 忘れることなく
先の未来を せめて希望の 糧にして
生き続けて 戒めとして
同じ過ちを 繰り返さぬように

さようなら あなた

「わたしは あなたのことが
好きでした」

『自殺衝動について』

ある日のこと　いつもの日常
全くの不意に　死にたくなつた
昔っから……　そうだった

どうにも　世間が厭になつた　とか
あるいは　自分のお先が真つ暗だから　とか
そんなに　高尚な理由はない
ただ一つ　苦しさだけが　ある
その昔に　あるアイドルが歌つた

「生きていく　そのことが　戦いだから」

その通りだと思ふし
それにあてはめれば
僕なんぞは敗残兵だ
白旗を揚げてさえも
無視されて殺される
その程度の下っ端だ

要するに　逃げたいんだ
性根から　小心者だしね
自分の中　価値を求めて
明白だよ　なんにもない

以前　古い友人が　言った

「世間は　あなたが思っているほど　あなたを気にしていない」

だったら　僕一人死んだところで　大したことは無い
そういう　結論を出してもいいはずだ
それでも　つまりは　根性がないから
結局今も　だから　生きてる
自殺には　相当の根性がある　それは知ってる
つまりは　僕はヘタレなのだろう
けれども　少なくとも　手首は切らないよ
おそらく　早死にするのは　ほぼ確定なんだから　さ